

岸田 秀
ものぐさ箸やすめ

文藝春秋



胡

ものぐさ箸やすめ

岸田 秀



著者紹介

昭和8（1933）年香川県生まれ。早稲田大学文学部心理学科卒，同大学院修了。現在和光大学人文学部教授。中学時代から強迫神経症に悩まされ，自身の心の問題を解決しようとしたのがこの道に進んだきっかけ。やがて強迫症状はすべて自分を支配しようとした母親との葛藤から起きたものと悟り，神経症から解放される。昭和52（1977）年，人間は本能の壊れた動物であり，「幻想」や「物語」に従って行動しているにすぎないとする「史的唯幻論」を『ものぐさ精神分析』のなかで披瀝，一大センセーションを呼ぶ。以降，精神分析学の手法を社会，集団にも適用させる特異な文明批評家として人気を博す。主著に『ものぐさ精神分析』三部作のほか、『幻想の未来』『嫉妬の時代』『フロイドを読む』『吹き寄せ雑文集』など多数。

ものぐさ箸やすめ

一九九三年五月二十五日第一刷

著者 岸田 秀

発行者 堤 堯

発行者 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 東京（三二六五）一一二一

郵便番号一〇二
印刷 精興社
製本 矢嶋製本

定価はカバーに表示してあります。
落丁乱丁の場合は小社営業部にて送料当社負担でお取替えいたします。

© Shyu Kishida 1993

Printed in Japan

ISBN 4-16-347540-0

ものぐさ箸やすめ／目次

I

幻想のアルザス	12
不幸への対処法	33
アメリカにとっての湾岸戦争	37
人種差別	41
ソ連の崩壊	43
「敵」を作りだす個人と国家	49
精神分裂症状の行方	53
日米相互誤解	60
一般論は無意味である	64
宣戦布告の思想	68

いま、三島由紀夫の「檄」を読んで
変化しないフランス、変化する日本
学校教育について

II

男と女の性の現在

男が弱くなったのはなぜか

性倒錯はなぜ男に多いか

性における男の弱さ

「モノ化」される女性

父親の発明、母親の発明

娼婦か母親か

72 74 78

92

95

98

101

104

108

売春婦の位置	111
羨望する女	115
神話の崩壊	119
性の自閉症	122
イエロー・キャブ	126
続イエロー・キャブ	130
愛される必要性	134
女と女のイメージ	137
男と女のポルノグラフィ	140
性は解放されたか	153

III

書くという病

わたしはなぜ外国語をしゃべるのが苦手か

己惚れ

信頼とは何か

ひまの恐怖

善行と傲慢

矛盾

恐怖とは何か

精神分析とわたし

末代までの罪

親の受難、子の受難

220

個人の興隆と滅亡

223

自然を愛する日本人

227

夫婦協定

230

ヨーロッパの列車

232

対談のシナリオ

235

点鬼簿

238

新体詩人より漢詩人へ

242

アルベルト・フジモリとストラスブールの仲間たち

244

おとなしくなった学生

248

IV

最も人間臭いドラマ

性差別解消の第一歩

新しい男と女、親と子の関係のあり方を模索

偶然が一人の女の一生を歴史的なものにした

“自己開発セミナー” 品定め

死者が構造化する生の世界

繰り返し指摘されてきた男と女の違い

あとがき

252

256

267

275

278

280

282

285

装帧／木幡朋介

ものぐさ箸やすめ

I

幻想のアルザス——引き裂かれたヨーロッパ人

(一)

昨年（一九八八年）の春、大学から学外研修という名の休暇が出て、一年間、世界のどこか好きなところへ行ってぶらぶらしていいということになった。わたしははじめ、最初の半年を、昔二十何年か前に三年足らずいたことのあるフランスはアルザスのストラスブール大学で過ごし、あとの半年をアメリカはニューヨークのコロンビア大学で何かやろうと考えて、フランスとアメリカのビザを申請したのだが、申請の書類に不備があったらしくアメリカのビザがおりなかった。書類を規定通り揃えればよかったのだが、持ち前のものぐさ根性が頭をもたげてめんどくさくなり、それならフランスで一年間いればいいと考え直して、懐かしのストラスブールへと向かった。二十何年かほとんど使ったことのないわたしのフランス語が通じるかどうか、はなはだ心配であった。

昔、留学先としてストラスブール大学を選んだのは、わたしの専門の精神分析の研究のために

この大学がとくに適しているとか、そこに教えを受けたい教授がいるとかのためではなくて、この大学がアルザスにあるからであった。と言っても、アルザスのことをよく知っていたわけではない。何度もドイツになったりフランスになったりしている不安定な引き裂かれた土地だということぐらいしか知らなかった。しかし、このことがわたしを惹き寄せた。

もちろん、その頃はまだ、近代日本は精神分裂病であるとするわたしの説ははっきりと形を成してはいなかったが、明治以来の脱亜入欧の努力の結果、アジア人でありながら半分ヨーロッパ人であるような日本人の不安定な引き裂かれたアイデンティティの問題はすでにわたしの心を長く捉えていた。

日本人はどう転んでも皮膚の黄色いアジア人で、白いヨーロッパ人になることはできない。かと言って、これほどまで進んでしまった西欧化を元に戻すことも不可能である。だとすれば、日本人はいつまでも引き裂かれたままであろうか。もしヨーロッパ人がヨーロッパ人として安定したアイデンティティをもち、そこに何の疑いももたず自信に満ちているのであれば、そういう自信に満ちたヨーロッパ人と、アジアとヨーロッパとのあいだに引き裂かれている日本人とのあいだには絶対的な隔たりがあり、この隔たりは永久に乗り越えられず、ヨーロッパ人になりたくてなれない日本人は永久にヨーロッパ人に対して劣者でありつづけなければならないことになろう。この袋小路からの出口はないであろうか。

自分がどこまで明確にこの問題を捉えていたかは、何しろだいぶ昔のことなので定かではない

が、わたしはアルザス人のなかに、日本人と同じように引き裂かれているヨーロッパ人を見つけ出せるのではないかという漠然とした直観的期待に引きずられてアルザスの大学を選んだのではないかと思われる。もちろん、近代ヨーロッパ文明の浸蝕を受けて安定したアイデンティティを失った民族は日本人だけではないから、日本人と同じように引き裂かれた人たちはアジアにもアフリカにもアメリカにもたくさんいるであらう。しかし、日本人がアジアとヨーロッパとのあいだに引き裂かれている以上、そして、ヨーロッパ人になりたがったということが日本人が引き裂かれていることの根源にある以上、わたしは引き裂かれたアジアやアフリカ人ではなく、引き裂かれたヨーロッパ人を見つけたかったのである。

これが見つかれば、日本人とヨーロッパ人との隔たりをいくらか埋めることができるような気がしていた。もちろん、これは幻想であり、そのようなヨーロッパ人がいたからと言って、近代日本人の葛藤が解決するわけではないことはちょっと考えればすぐわかることであるが、とにかく当時のわたしは、ぼんやりとそのようなことを考えていたのであった。わたしは現実のアルザスではなく、わたしの想像の中のアルザス、幻想のアルザスに惹き寄せられたのである。

(二)

ほぼ四半世紀前、第一回目にストラスブールに住んだとき、わたしは土地の人たち、市民や学